特集 東日本大震災から4年

3面・8面 YWCAの被災者支援活動
4～5面 料理研究家・枝元なほみさんインタビュー
6～7面 YWCAフェスタ in 沖縄

The Young Women's Christian Association

YWCA

日本YWCAの使命（ミッション）
イエス・キリストに学び、共に生きる世界を実現する
世界の人々と共に人権・平和・環境の問題に取り組む

第31総会期主題
平和を実現する人々は幸いであるーマタイによる福音書5章9節

日本YWCAビジョン2015
（1）・非核・非暴力により平和を実現する
・平和憲法をまもり、世界に広める
・原発のない社会をつくる
・市民レベルで東北アジアの信頼関係を築く
（2）女性と子どもの権利をまもる
（3）若い女性のリーダーシップを養成する

4
APRIL 2015
No.725

www.ywca.or.jp

「子ども時代」を奪った原発事故
今、試される大人の覚悟

白石　草
Hajime Shiraishi

profile
早稲田大学卒業後、テレビ局勤務などを経て、2001年に非営利のインターネット放送局「OurPlanet-TV」を設立。マスメディアでは扱いにくいテーマを中心に番組を制作配信する一方、映像ワークショップを展開し、メディアの担い手作りに取り組む。一橋大学大学院地球社会研究科客員准教授。3.11以降の原発報道に対し、2012年「放送ウーマン賞」ほか各賞を受賞。主著に『ルポ・チェルノブイリ28年目の子どもたち～ウクライナの取り組みに学ぶ』『メディアをつくる～「小さな声」を伝えるために』（岩波ブックレット）ほか。

OurPlanet-TVのウェブサイト
http://www.ourplanet-tv.org/

「お外で遊びたい」

東京電力福島第一原子力発電所事故から1月半ほど経った2011年4月末。福島県内のある幼稚園で、せつない光景を目にした。

桜が満開となったその日、幼稚園では、事故後はじめて子どもたちを園庭に出し、桜の木を背に記念写真を撮影した。桜の木の下での記念写真は30年来の恒例行事。桜が散る前にどうしても撮りたかったと園長はいう。

写真撮影を終えると、先生は即座に子どもたちにマスクをつけ、埃を払って園内に押し込んだ。すると一人の女の子がそれに抵抗した。

「お外で遊びたい」

先生はやさしい声で「今はダメなんだよ」「ごめんね」と声をかけたが、女の子はすねて後ろを向いてしまった。

一番、からだを動かしたい育ち盛りの子どもたち。その子どもたちが、一歩も外に出られず、屋内で過ごさざるを得ない日々を送っている。何とも言えない思いがこみ上げてきた。持参した放射線測定器は、1マイクロシーベルトを超えていた。

あれから4年ー。

自然減衰や除染などにより、放射線量は半分以下に低減した。しかし、子どもたちの生活は元に戻っていない。除染を終えた園庭や校庭では遊べるものの、通学路などにはまだ線量の高いホットスポットが点在している。道草をして道端のペンペン草をむしったり、ダンゴムシを捕ったりすることはできない。目に見えない放射性物質の汚染

エンパワーするNGO
YWCA

東日本大震災被災者支援募金

YWCAは、3.11に
生まれた子どもたちが
20歳になるまで支援を継続します。
皆様のご協力をお願いいたします。

＊「被災者支援募金」とお書きください。
＊領収書・寄付控除の書類をお送りするため、ご住所とお名前をお知らせください。

銀行振込
三井住友銀行　飯田橋支店（店番888）
普通預金　口座番号 1198743
（口座名義）　公益財団法人 日本YWCA
コウエキザイダンホウジン
ニホンワイダブリユーシーエー

郵便振替
00170-7-23723
（加入者名）　公益財団法人日本YWCA

インターネット募金
http://kessai.canpan.info/org/ywcaofjapan/

日本YWCA　東日本大震災被災者支援活動
－女性と子どもの安全と安心のために－

3本の柱

1 セカンドハウスプログラム

YWCAは、放射線量の高い地域で生活をしている家族が滞在できるよう、年間を通じて横浜・名古屋・神戸の3軒の住居を提供しています。利用者の方々の負担を軽減するため、交通費の補助も行っています。

●利用者の声
「保養に行きたくても交通費が問題でした。とてもありがたい支援だと思いました」
「引っ越しを考えないわけではありません。でも、現実的にお金・仕事・学校・家族・家・お墓のことがあり、決断できずにいます。だからせめて『保養』というギリギリの選択なのだとわかっていただきたい」
「マスクを外し、元気いっぱい走り、笑う子どもたちの顔を見て、機会を与えてくださった方々に心から感謝」

2 保養プログラム

被災によって心と身体に大きなストレスを抱えている子どもやお母さんたちのために、被災地を離れ、楽しい時間の中でリフレッシュしてもらうプログラムを全国の地域YWCAが実施しています。

●参加者の声
「ホームステイ先ではまるで我が家のように心温まるおもてなしをいただいた」
「子どものためにここに来たけれど、私自身もこの環境と温かいおもてなしに癒された」
「大学生も子どもたちとよく遊んでくれた。自分たちのために日々を費やしてくれたことに驚きを感じた」
「普通の生活を思い出させていただいたことに感謝。私たちにとっては『普通の生活』こそが『非日常』なのです」

3 「カーロふくしま」

福島市にあるYWCA活動スペース「カーロふくしま」は、地域に住む女性と子どもが集うスペースです。
子育て中のお母さんたちのための各種ワークショップや講座を開催しています。

●来客者の声
「ここに来れば何か心から癒されるかもしれないと期待してきました」
「ここでの出会いが励み。震災後自分の考えがなかなか言えない社会の中で、ここは特別、解放される」
「ここで講座を受けた後、『自分も人のために何かしたい』と思った。その後セラピストの資格を取った」
「新しい友達もでき、ワークショップも楽しい」

ご協力ありがとうございます

賛助費
和田崇子　本田恭子　木下由美子
俵　恭子　藤井初子　赤石めぐみ
岩崎妙子　浦和ＹＷＣＡ

ピースメーカーズ募金（平和を創り出す女性のリーダーシップ養成）
武谷妙子　俵　恭子　松崎知惠子
内藤文枝　藤井初子　小池与之祐
島田　進　田中　甫　遠藤彩代
大森築子　大森清一　安藤司文
石橋教弘　清野　量　山本隆久
俣野尚子
日本キリスト教会横浜長老教会
日本基督教団茨城地区社会部
公益財団法人横浜ＹＷＣＡ
公益財団法人神戸ＹＷＣＡ
匿名

災害時支援募金（国内外の災害被災者支援）
藤井初子　俵　恭子　青木浩子
中部学院大学宗教委員会
旭川星光伝道所　清水真理
東京ＹＷＣＡまきば保育園
東京ＹＷＣＡ国領センター
公益財団法人神戸ＹＷＣＡ
浦和ＹＷＣＡ　長崎ＹＷＣＡ
エボラ出血熱対策支援募金
中部学院大学宗教委員会
一般財団法人名古屋ＹＷＣＡ
手島千景　静岡ＹＷＣＡ

オリーブの木キャンペーン募金
野々村耀　木村浩子　山本貴美子
堀江宣子　天野文子　添野ふみ子
大野康子　青木浩子　滝澤美知子
杉山知子　吹田　勝　小宮山　栄
小渕真理　山本智子　山中光子
俵　恭子　月原綾子　伊藤恵之
沖縄伝道所　川越　弘
美唄めぐみ幼稚園
ルーテル学院中学・高等学校
日本基督教団代々木上原教会
大阪ＹＷＣＡ大宮保育園
仙台ＹＷＣＡ　静岡ＹＷＣＡ
一般財団法人函館ＹＷＣＡ
公益財団法人神戸ＹＷＣＡ
パレスチナＹＷＣＡ支援募金
浦和ＹＷＣＡ

東日本大震災被災者支援募金
木村浩子　堀江宣子　小宮山　栄
青木浩子　青木惠子　新川美惠子
杉山知子　石川松子　小野田照代
宋　富子　俵　恭子　山本貴美子
藤井初子　天野文子　久宗百合子
中尾廣美　松川ゆか　鎌原惠子
秋枝薫子　寺沢京子　塩尻和子
地球っこくらぶ・善隣館
シオン幼稚園
大森ルーテル教会付属幼稚園
関西学院宗教活動委員会
東洋英和女学院中学高等部母の会
とわの森三愛高生徒教職員ご一同
大阪女学院中学・高等学校宗教部
普連土学園中学校・高等学校宗教委員会
横浜英和学院
女子学院高等学校
学校法人玉川聖学院
活水中学校・高等学校
尚絅学院中学校・高等学校
広島女学院中学校・高等学校
ルーテル学院中学・高等学校
旭川星光伝道所　清水真理
長崎平和記念教会　女性会
日立聖アンデレ教会日曜学校
愛知聖ルカ教会
聖マーガレット教会
日本基督教団平安教会
日本キリスト教団都島教会
日本聖公会宮古聖ヤコブ教会
日本基督教団代々木上原教会
日本基督教団ひばりが丘教会
日本バプテスト連盟日野神明キリスト教会
日本キリスト教団　西千葉教会
東京平和教会（駒込チャペル）
公益財団法人横浜ＹＷＣＡ クリスマスを祝う会参加者一同
公益財団法人福岡ＹＷＣＡ
一般財団法人名古屋ＹＷＣＡ
浦和ＹＷＣＡ　静岡ＹＷＣＡ
公益財団法人神戸ＹＷＣＡ
一般財団法人呉ＹＷＣＡ　匿名
世界ＹＷＣＡ総会派遣募金
雀部真理　俵　恭子　俣野尚子
日本ＹＷＣＡ指導者養成寄付金
俵　恭子
（2014年12月21日～2015年2月20日現在　敬称略）

発行所 公益財団法人日本YWCA　〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11　東京YWCA会館302号室
Tel. 03・3292・6121　Fax.03・3292・6122　office-japan@ywca.or.jp　www.ywca.or.jp
編集発行人 石井摩耶子／偶数月1日発行

旬な情報発信しています　メルマガ登録　y-net@ywca.or.jp　にお名前を送ってください ／ フェイスブック　www.facebook.com/YWCAJapan

メールにてご意見・ご感想をお寄せください。今後の紙面づくりの参考にさせていただきます。 office-japan@ywca.or.jp

無断での複写・転用・転載はご遠慮ください。

により、子ども時代、誰もが経験する小さな冒険や生物との関わりが禁じられている。福島市のある小学校5年生の女の子はこんな詩を書いた。

サルビアの蜜がとても好きなのに、
今では吸えない
私の中ののう胞ががんになるの？
ブランコにはもう乗れない
前は草原を走れたのにもうできない
除染してもムダだ
もとの福島を返せ
美味しいモモやナシを食べられない
おばあちゃんの家の野菜が
食べられない

私は2013年と2014年の2度にわたり、ウクライナに足を運び、チェルノブイリの被害を受けた子どもたちの状況を取材した。長期に訪問したのは、セシウム137による土壌汚染が福島市とほぼ同レベルにあるジトーミル州北部の町コロステン。チェルノブイリ原発から140キロに位置する人口6万6千人の地方都市だ。

学校に足を運ぶと、子どもたちは皆礼儀正しく、一見、日本の学校と変わらない。しかし先生に話を聞くと、子どもたちの多くは様々な慢性疾患を抱え、健康な子は多くないという。

ウクライナでは事故後、体育の授業を見直し、3つのグループに分けて体育を行っている。健康な子どもは従来通りの授業を受けるが、そうでない子は、無理のないメニューにしたり、特別な体操をしたりしている。その学校では、元気な子のグループ157人に対し、配慮の必要な子のグループは385人、特別なグループは90人。その他、体育を受けられない子が13人いた。事故から28年が経ち、直接、事故を知らない次の世代の子どもたちに、幅広い健康影響が出てきているのである。

こうした子どもたちに欠かせないのが、国が実施している「保養事業」である。健康に課題のある子どもたちは、年に1回か2回、その病気に適した施設で治療を受ける。キエフ郊外にある保健省の施設では、1986年以来、毎年約3千人の子どもを受け入れている。子どもたちの免疫力向上のため、投薬などの西洋医療だけでなく、温熱療法や、ハーブティーの処方、鍼や灸といった自然療法に力を入れていた。

ウクライナの場合、こうした介入的な治療を行う保養のほか、特に疾病がない子どもを対象とした保養事業もある。もともとは旧ソ連時代に実施されていた「ピオネール・キャンプ」という青少年健全育成事業がルーツだ。「ピオネール」とは「パイオニア（開拓者）」の意味で、いわば「ボーイスカウト」のソ連版。子どもたちは3週間、自然を満喫したり、伝統や芸術に触れたりし、様々な可能性を広げる。また子ども同士での生活を通じ、互いの立場を尊重することを覚え、自立心を育む。親のない子、貧困家庭の子、きょうだいの多い子など、家庭に課題のある子どもが優先的に参加できる。今の日本でも効果がありそうな素晴らしい事業だ。もちろん、疾病の予防という意味合いもある。

日本に比べ、すべての面で課題の多いウクライナ。しかし、いくら財政難であっても、子どもたちの保養や健診の予算は削減しないと、政府関係者は口を揃える。日本は一体、何のために経済的に豊かになったのか。度々そんな思いを抱いた。

福島県の甲状腺検査では、現在、100人を超える子どもたちから甲状腺がんが見つかり、保護者の間に不安が高まっている。しかし政府や県は「日本では健康影響は認められていない」との一点張りで、必要な対策を怠っている。福島県外に至っては、被曝している事実さえ認めていない。

事故以来、「子ども時代」を奪われた日本の子どもたち。私たち大人は一体何ができるのか。その覚悟が試されている。

種

主の言葉がわたしに臨んだ。「エレミヤよ、何が見えるか。」わたしは答えた。「アーモンド（シャーケード）の枝が見えます。」主はわたしに言われた。「あなたの見るとおりだ。わたしは、わたしの言葉を成し遂げようと見張っている（ショーケード）。」

（エレミヤ書1章11～12節）

アーモンドの枝には、日本でみられる桜の花のような薄ピンクの小さい花がたくさんつきます。この季節に目をあげて枝を見つめる時、苦難の中に花が咲く希望を持ちたいと思います。エレミヤは「悲嘆の預言者」と呼ばれます。預言は人々に受け入れられず、苦労は報われず、厳しい言葉を語り続けねばなりません。反対者も多く、無理解が彼の肩にのしかかります。激しくこの世に抗うための行動を余儀なくされます。何をやっても無駄だと思い、絶望だけが残されたと感じることもあります。

わたしたちも、甚大な災害被害をはじめ、大きな困難を前にした時、無力感に引きずられます。しかし、枝を、花を見ることが、わたしたちに示された方法です。散り落ちる花びらの虚無ではなく、また来年必ず咲く約束を枝に見たいと思います。どんなに苦しくとも、神が見ているのですから、わたしたちも、目をそらさずに、必ず咲く明日のアーモンドの花、桜にある希望を携えていたいと思います。

渡邊さゆり
日本バプテスト神学校教務主任

YWCAの被災者支援活動

“いりゃあせ”
名古屋弁で
「いらっしゃい」

名古屋YWCA　保養プログラム

2014夏「名古屋いりゃあせツアー」

2014年8月、福島県の小学生親子11組32人の保養プログラム（4泊5日）を名古屋学院大学と共催で実施しました。3回目の「名古屋いりゃあせツアー」です。名古屋郊外、瀬戸市の山腹にある自然豊かな大学キャンパスに宿泊し、学生ボランティアが担当家族をサポートしました。広大なキャンパス、一番人気の岩屋堂公園での川遊びも満喫し、そして名古屋の街へ。名古屋港水族館、名古屋YWCAで「さをり織り」体験、日本語を学ぶ外国人生徒と一緒に工作、YWCA会員との交流会もある盛りだくさんなプログラムでした。

岩屋堂公園で水遊び

宿舎の前で全員集合

世の中の「福島はもう大丈夫」という空気の中、参加されたお母さんたちは、家庭内でも、また母親同士でも自身の不安な気持ちを話せないと言われ、このツアーで同じ気持ちの方々と知り合えたと喜んでおられました。

ボランティアは、社会人と学生（他大学の学生も参加）が一緒に事前研修を重ねました。多くの学生がボランティア初体験で、不安を胸に参加しましたが、子どもたちと手をつなぎ一緒に遊ぶことで、その表情は日々変化していきました。学生たちは、お母さんたちと話すことで福島の現状を肌で感じ、人に寄り添うことの大事さを実感したことでしょう。

名古屋YWCA会員　蓮尾陽子

日本YWCA人材養成部主催講座@カーロふくしま

女性のためのコミュニケーション講座

よりよい関係づくりのために

「人と対等に、誠実に、また自分自身に正直に、自信を持って生きていく。攻撃的にならず、卑屈にもならず、自然な態度で人とつき合う。私たち一人ひとりがそんな生き方ができるようになりたい。ありのままの自分をみつめ、気持ちを言葉にし、お互いに聴き合い認め合う経験を通して、自分自身を大切にする心を育て、人との関係性を育みましょう」という思いを、福島の女性、特にお母さんたちに届けたいと考え、YWCA活動スペース「カーロふくしま」にて、女性のためのコミュニケーション講座を開催してきました。

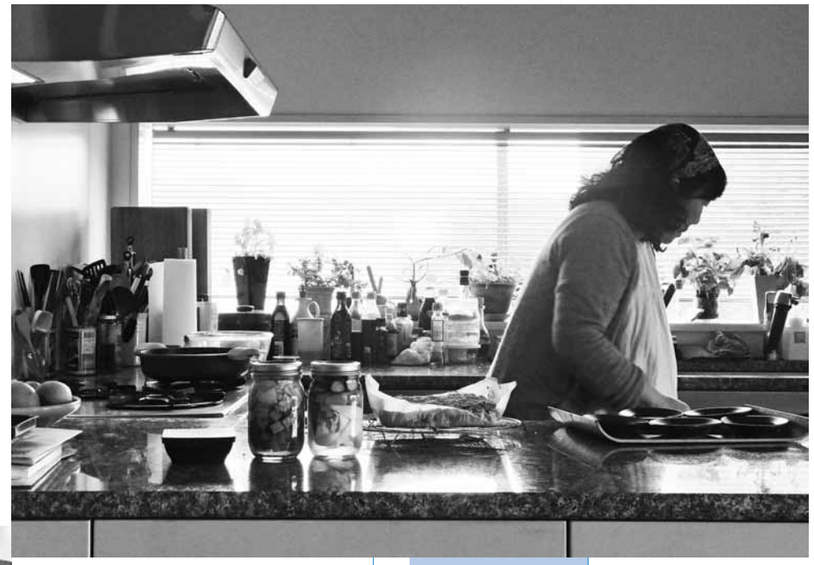
「ワークショップ形式の参加は初めてです」と言われる参加者が多い中、いつも和気あいあいとした雰囲気で進めることができるのは、皆さんが自分自身の思いを語れる場を求めていらっしゃるからだと感じます。女性同士、何を語っても大丈夫という安心感が得られていることも大きな要素ではないでしょうか。自分の思いを伝えるコツを理解し、「今度、言ってみます」と勇気を持たれる姿に、毎回感銘を受けています。今後も、「自分自身の思いを語り合う場」を通して、女性たちが元気になることを応援したいと思います。

ウィメンズカウンセリング名古屋YWCA
フェミニストカウンセラー　増井さとみ

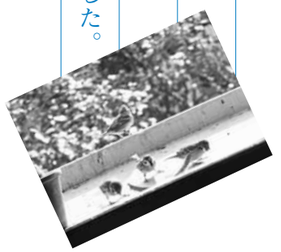
台所の窓を開けて社会とつながる

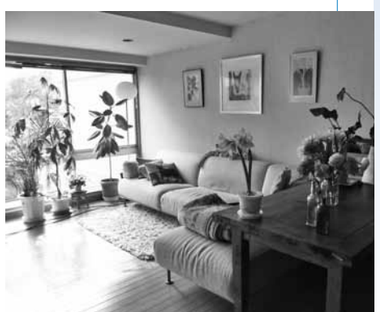
料理研究家・
枝元なほみさん
インタビュー

「料理しながらずっと窓の外を見ているんです。目の端に緑を置いておくことができて、幸せだなあと思って」枝元さんは、窓辺のスズメに餌をやりながら、日々の想いを言葉に紡いでくださいました。



料理研究家としてテレビ・新聞・雑誌等で活躍。東日本大震災の被災地を「にこまるクッキー」で支援する「にこまるプロジェクト」、生産者と消費者をつなぐ「チームむかご」http://mukago.jp/など、社会的な活動でも知られる。





こぼれ落ちることこそ大切にしたい

震災の後、必要だったのは落ち着いて普通に暮らしていくことでした。幸い私の仕事は料理なので、生きること、日常の近くに仕事がありました。それは、怖いと思いながらも、日常に根を張って、”美味しく作るには、”本当にいい食べ物は…“と考えていくうちに、どんどん土の中に降りていって、毛細血管が水滴を集め、自分の生きているところに土の中の養分を送っていくようなこと。政治や大企業、科学者が上の方で世の中を決めていくのではなく、「私が生きていく」ことは「私から」なんだ、と思います。大きなことからこぼれ落ちていくことを拾い集め、大事にしていくことに、生きていくことがあるんだと思う。

手のひらで感じた安心感

震災の時、私は自分自身がどうしたらいいのかわからない状態から救われたいと思っていました。被災された方がコンビニの白いごはんを召し上がっている時、私だったら佃煮やふりかけがあればと思うから、家にあるゴマ、わかめ、梅干を乾燥させてふりかけにしたり、粉とバターと砂糖があったから、それでできるクッキーを作ることを考えました。情報が何も入らず、暗い気持ちと不安の中、人と一緒に、手を使って、誰かに食べてもらえるものを作ることで、とても落ち着いたんです。料理したことのない人たちも一緒に、クッキーをコロコロ丸める。手のひらで感じていく安心感ってすごくあるなあって思った。それを被災地の方に作ってもらい、買い支えようと考えたのが「にこまるクッキー」でした。何かをあげるのではなく仕事を渡す。一人ひとりが自分で立っていくところに一緒にい続けることが大切だと思っています。

原発事故の後で

放射能のこと、心配を言葉に出しちゃいけないとか、化学や物理がわからないのに何言ってるんだとかいう雰囲気はパワハラだと思う。事故後、これを買うべきかどうか迷うという声がいっぱい聞かれました。他方、福島の生産者はとても疲れてきている。両方に対して答えがなく、解決できないでいます。私も、自分が食べるのはいいけれど、若い人に食べてもらうと思うと考えてしまう。

今は、保養に行くということさえ言えない人、「みんな帰ってきたのにあんたはなぜ帰ってこないのか」と言われる母子避難の人、農家だけど自分以外の家族はみんな気にしていない人とか、本当にいろいろな立場の人がいて。どんな結論を出すかは人それぞれで、受け入れていくしかないんだと思います。

日々の暮らしから価値観を変えていく

日常の暮らしから考えていくことは、やっぱり強いと思う。ある立派な会館の台所で料理の準備をしたとき、使いづらいだけでなく危険を感じた。台所を使ったこともないような人が設計しちゃいけないと思いました。

私のいるマンションも再開発の対象で取り壊される可能性があるのだけど、作って壊してという暮らし方ではダメ。戦争も同じ。食べ物で言えば、金持ちの国が大量生産・廃棄を繰り返している。自分がもっと得るために他人を犠牲にするループから抜け出さないと、自分も幸せになれない。価値観を変えるには、大きなことからではなく、日々のことから考えて、迷いながら先に進んでいく感性が必要なんだと思います。

世界文化遺産になった和食の代表は、高価な懐石料理ではなく、手作りのおむすびやお味噌汁でいいじゃない？お金やイデオロギーで決まることではなく、そこから抜け落ちてしまうものこそが、土台を支えていると思う。

「食べて生きる」という共通項を土台に、社会とつながる

ある高校に料理の授業に行き、食べたものを4日間毎日書いてもらいました。そしたらコンビニ弁当、菓子パン、インスタント食品が多くて、ちょっとショックを受けました。でも、裕福な家庭は多くなく、生徒たちは皆アルバイトしていると聞いたので、「君も今日からできる！」みたいな、買うより安く、簡単にできて美味しいメニューを伝えました。それまでは、野菜は化学肥料や農薬を使っていないもの、卵は一個60円出しても本当に良い物がいいと思っていたけど、高校生たちを見ていたら、安いのでいいから卵を目玉焼きにして、とにかく頑張って、と応援したくなっちゃう。生きることは食べることとくっついていて、その人が食べているものを否定することは、その人の生きていくと、対立か否定しか生まれない。違いを探すのではなく、食べて、寝て、起きて、働いてっていう共通項から探していくのがいいと思います。誰かの正義は別の誰かから見れば正義じゃない。でも、どんなことがあっても、ご飯を作って食べて、ということを続けてこなかったら、人類は生き残ってこられなかった。食べて生きる、ということを土台に、台所の窓を開けて社会とつながって、自分の感覚で、それっておかしいよって、もっと言っていいはずです。

枝元さんお手製のアップルクランブル

誰かが言う「安全安心」に身を任せる？

誰かに任せて文句を言う社会から、一人ひとりがリスクを負って、考えていく社会にしないとっていう宮台真司さんの言葉がストンと落ちた。任せて文句を言う社会は、物質文明、消費生活が始まってからのメンタリティだなと思う。食べ物で言えば、売る人や政治家は、選んでもらうために「安全安心」って言うから、消費する側も「安全安心」は自動的に享受できる権利だと思ってる。でも生き物だったら賞味期限なんて関係なくて、自分で匂いを嗅いで、食べてダメなら口から出すたくましさがないと。自分で感じて判断するリスクを負わなければと思う。

本当に「安全安心」が欲しかったら、与えてもらうのを待たず、自分が作っていくこと。大根や人参を切りながら、「平和を作るのは私」と思ってる。大根や人参を切って食べさせることもできない人に、考えを委ねるなんて、一番安心できない。

作る人が食べる人のことを想って手で作った物は、失敗しても「まずーい！」と気持ちが動く。「安全安心」でリスクを負わないことで、気持ちも動かなくなっていると思う。では何が気持ちを動かすかと言えば、100万個の意見ではなく、手を使った食べ物や、一緒に泣くこと、大丈夫だよと見守って待つこと。一緒に食べて生きて、共に感じる共通項を増やしていくことでしか、人は変われないんだろうと思います。

インタビュー・写真・構成　編集部

2015 2.14～2.16

YWCAフェスタ in 沖縄

テーマ　沖縄で会いましょう、今の沖縄、過去の沖縄、そして今の日本に

沖縄の音楽に合わせて踊る参加者たち

基調講演をはじめ、各プログラムの講師の方々の多大な準備と協力のおかげで、沖縄を知ろうとする熱意にあふれた参加者は、「今の沖縄、過去の沖縄、そして今の日本に」出会うことができた。深くて豊かな学びの場の提供によって、皆の連帯が強まっていったと思う。若い人たちの活躍も目立った。

沖縄で今日の政治や基地を取り巻く状況について考え、女性や子どもが安心して生きられる社会の創造のために連帯する、そしてそのために世代を超えて働くボランティアのリーダーシップを養成するというフェスタの目的は、心を込めて受け入れてくださった沖縄の方々と参加者の皆さんの力で、果たされたと思う。心から感謝したい。

YWCAフェスタ実行委員長　東京YWCA会員
長澤幸江

「YWCAフェスタ in 沖縄」は、折しも辺野古の海で、海上保安庁が基地建設に反対する市民に対して海上や基地ゲート前で暴力的弾圧を繰り返し、市民に怪我人が続出するという緊迫した事態の只中での開催となった。

基調講演「憲法と女性の人権　沖縄で憲法を考える」では、対馬丸事件の生存者である平良啓子さんが、幼い日の壮絶な体験に根差した憲法への熱い想いを語った。生きる知恵と逞しさにあふれた平良さんの話に、一同大いに励まされた。

フェスタのテーマソングは、平良愛香さん作詞作曲の「ミルク世（ユ）　チュクラナ　ウチスリティ」だった。「人々が豊かに平和に暮らせる世の中をみんなで一緒につくっていこう」と歌う。全国、そして海外から集まった100名を越える参加者は、プログラムの最初から最後まで、この歌詞に心を合わせて繰り返し歌った。

2日目の朝は日曜礼拝で始まった。那覇新都心キリスト教会の岡田富美子さんは、イエス・キリストが辺野古で基地建設に反対する市民と共に座り込み、現実の只中で私たちに出会ってくださることの恵みを熱く語った。

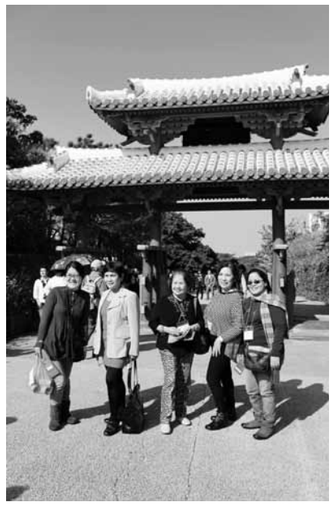
フェスタでの学びの中心は、何と言っても、3つのグループ（沖縄の歴史と文化・基地問題・教科書採択問題）に分かれて行ったフィールドワークだった。

沖縄の歴史と文化のグループは、琉球文化研究所の後多（しいた）田敦さんを講師に迎えた。独立した国際的立場をもち、女性が宗教的な指導者として重要な役割を担っていた琉球の文化が、ヤマトによる侵略と併合の歴史の中で変えられてきた経緯が語られた。沖縄は、先の戦争中、国内で唯一地上戦が行われた場所であり、今日も在日米軍基地の74％が沖縄に集中している。沖縄がこのような犠牲と負担を押し付けられてきた背景には、それ以前からの歴史がある。首里城での琉球舞踏観賞、伝統楽器の紹介など、充実したコースの最後には、三線の奏者でもある望月智牧師（日本基督教団志真志（しましし）伝道所）に案内され、嘉数（かかず）高台より普天間基地を展望した。

参加者のおよそ半数は、基地問題のコースに参加した。ガイドは、辺野古の埋め立てに抵抗するため、カヌーで海に出ている川上佳子さん（沖縄キリスト教センター職員）。住宅街のど真ん中に位置する世界一危険な普天間飛行場、広大な嘉手納基地、そしてジュゴンが回遊し、貴重なサンゴ礁の生態系が残る大浦湾辺野古を訪れた。湾には海上保安庁の船団が陣取り、人々は小さなカヌーに乗って抵抗している。キャンプ・シュワブのゲート前には沖縄だけでなく全国から多くの人々が集まり、緊張の連続のなかで抗議と監視の座り込みを続けている。辺野古の海を護る闘いは、今や24時間体制となっている。福島YWCAからの参加者とフィリピンYWCAからのゲストが、マイクを持って応援のメッセージを語った。16時になるとその場にいた人々が立ち上がり、手を繋いで大きな輪を作った。「上を向いて歩こう」を歌い、オリオンビールの曲に合わせて両腕を高く振り挙げ元気に踊った。どんな時にも沖縄の人々は歌い踊ることを忘れない。苦難の歴史を貫いて、そして現在の緊迫した状況の中で、諦めず、自棄にならず、不屈の精神で闘い続けるその力の源には、琉球の歌と踊りがあるのではないだろうか。

キャンプ・シュワブのゲート前で輪になって歌う

3つめのグループは、琉球大学教育学部准教授の山口剛史さんの講義で、八重山地区の中学校社会科教科書の採択問題について学んだ。八重山では、教職員組合が中心となって、歴史修正主義系の教科書を推進した石垣市教育委員会に対し、教科書採択の方法や教科書の内容を問う運動が展開されてきた。元は竹富町の教師であった山口さんからは、教育や政治に対する離島の価値観や教育現場の実情なども交えた、実感のこもった話を聞くことができた。講義の後、首里城の第32軍司令部壕跡、糸満市の「沖縄県平和祈念資料館」を見学し、沖縄戦の真実について学んだ。参加者からは、いかに歴史が「選択」され、解釈や言い回しで事実が変えられていくのかを学んだという感想が聞かれた。



首里城守礼門前でフィリピンYWCAの皆さんと

それぞれの有意義なフィールドワークから戻り、夜の交流会では伝統音楽やラップなど、沖縄の音楽と踊りを満喫した。三線の音や、琉球横笛とギターの共演に心奪われた。リズミカルな演奏に合わせて、ここでもみんなで賑やかに踊った。

最終日、参加者全員がそれぞれの想いを布に綴って繋げ、一つの大きな円を作った。今ごろは、辺野古の基地境界の頑丈なフェンスの上に、はためいていることだろう。「命（ぬち）どう宝（命こそ宝）」の行動に、各地の現場で連なっていくという平和への決意を胸に、散会となった。

編集部